

第五章 大正に於ける京大教授時代(下)

一、嗣息秀雄氏の夭折

和平の氣
融々たる
博士の家
庭

嚴堂の逝去を見たる幼時の不幸は別とし、工學寮より工部大學への苦學時代をも又姑く謂はず。京都府技師時代を経て結婚以後の博士は、學者生活の刻苦公生活の繁劇なる一面、其の家庭は常に融々たる和平の氣に充ち、以つて博士が門外の塵勞を洗ふに餘りあつた。此の意味に於いて、博士は極めて幸運の人であつたが、大正時代に入るや不幸は突如として博士の私生活を見舞ひ、疇昔まで人の羨望するところたりし博士は一朝にして他の弔悔を享けざるべからざる悲痛事に會した。あゝ大正三年八月十三日、此の日は田邊家にとりて何たる不祥の日ぞ。博士の嗣子秀雄氏は、此の日を以つて永久に他界の人となつたのであるが、さるにても彼や、父母に別れ同胞に離れ前途の光明に背きつゝ、何とて慌たゞしくも斯くは還らぬ旅に急いだのであらう。

詩人キイツ詠うて曰く、神に愛せらるゝ者は早逝す」と。まことや彼は神に愛せら

大正三年
八月嗣息
の夭折

神に愛せ
らるゝ者
は早逝す

るゝにふさはしい聰慧にして、天品高き青年であつた。小學校に通ひそめし時より、今一年にして學士の稱號を得べき大學生活の日まで、彼の學業は常に優秀、彼の品性は常に高邁、青年の龜鑑としてまた學徒の模範として容易に得難き人材であつた。享年僅に二十有三。豫期せざりし彼の計に接して、彼が生前の風貌を知るもの面を掩うて泣かざるはない。彼の學べるは東大工科の建築學科であつたが、前途の造詣は學内一齊に待望の的となり、其の逝くに及んではせめては彼が尊き在世中の倂を偲ばんものと、同窓舉つて贖金して、其の半身の銅像を作るの資に當つた。父なる博士また彼が志の在りしところを悲しみ、彼の名を以つてせる獎學資金と、右の半身銅像の寄附を山川東京帝國大學總長に出願し、彼の愛弟主計氏は、泣いて追想録一卷を編み、彼の高き人格を永久に傳へむとした。即ち書の目次に題していふ「兄様についての文章」と。何ぞ兄弟の情の可憐なる。而して其の文章のうち博士のものせる「涙一痕」一篇は親子の至情を盡して、哀切の韻、轉た人をして卒讀に堪へざらしむるものである。

獎學資金
の寄附と
博士執筆
の「涙一
痕」

涙 一 痕

七月二十二日の夕刻であつた、東京順天堂病院の靜のミところから早く來て被下ミ云ふ意味

の電報が到着した「アスノバン」タツミ返電を出し公務を無理やりに片付けて二十四日朝新橋へ着てみるに静ミ新坂の田邊家へ養子に行つて居る次男の主計ミが迎に來て居つた。一寸秀雄の様子を聞いて直に其足で順天堂へ行き見舞つたが左のみ弱つては居らなかつた。阿久津先生にお目に懸つて伺つて見るに手術をした方がよろしいと云ふ御話である。運命は神より外に知るものはなし肉體の事はお醫者に任すより致方がない、何分宜敷ミ御依頼した。

秀雄は余の長男で明治二十六年の一月生れ本年二十三歳幼少の頃は病身であつて十五迄はもてまいかミ云つた人もあつたが十三の年中學へ入學した頃からメキ／＼ミ丈夫になり運動會では賞與を得る、特待生にはなる、何一つの世話をやかしたこともなく一昨年東京の工科大學建築科へ入學し來年は卒業する譯である。

昨年歐米巡廻の歸途桑港に着くミ秀雄の手紙が來て居つた、此頃は理想通りの身體で朝四時半に起床し水浴をする、フランス語の稽古に行く、夫から大學へ八時前に行く、歸途テニスをする、家に歸つて勉強する、夜十時半に寐に就くミ一日中のプログラムが細に書いてあつた、之を見てそんな無理な事はせぬがよいミ感じなかつた。丈夫で結構だと思ふた。

昨年十一月下旬に横濱へ上陸して見るに丁度日曜日であるのに秀雄が來て居ない、さうしたかミ聞いて見るに腎臓が悪くて入院した安靜にせねばならぬからミの事。

東京に着いて麻布の額田病院で秀雄を見舞つたら元氣であつた、やがて暖地へ轉地するがよいこの事で相州地方へ行くことにきまつた、一時快方を見えたがやはり手術をせざるを得ざることゝなつたのだ。

七月二十九日午後にいよく手術をきまつて、一時間餘はかゝりませうと阿久津先生の云はれたのが五十分で済んで非常に好結果だと言ふ話である。手術の後は其夜翌日は非常に苦しむものであるのに秀雄はなんともない、丁度其頃金蔞繪の宝箱が下賜になつたので其模様、石蔞と菊の御紋の色の配合がよろしいと言つて悦んで見て居つた位で、皆々も安心し主計は弟妹の避暑に行つて居る明石海岸へ歸つた。手術のあつた四日目八月一日に秀雄は胃の工合が悪いと云て居たが綠色の水を一升許りも吐いた、そこで胃の洗滌をするがよいこの事で二三度やつたが八月二日の夕刻急に心臓が弱つて來た。さあ大變だと言わぎ出したが生憎日曜日で電話が甘く行かない。二人曳で額田先生阿久津先生佐藤先生の處へ飛んで行つて御願をする。皆さん御留守であつたが夜分遅く來て被下つて色々手當をして翌三日の朝には手足の色が紫色になつて來たので芥子温で温める。六つかしいと思つたものが一と先取戻しが出來た。さうだと言つて聞て見る。

「昨夜は大變なさわぎでした、然し秀雄は少しも苦くはありません、皆さん暑氣で御困りでしょうね」は意外の返事である、しかし様子はよろしくない、ので明石の主計のところに早く

來れど電報を出すに行違つて東京へ立つた後なので三男の多聞が開封し見て直に東京へ來たのは秀雄のなくなる前々日であつた。多聞が病院へ見舞に來たとき、オーお醫者かと思つたら、云つて秀雄が悦んだ。

十三日の夜は大風雨で前日の暑氣にひきかへ冷氣であつた醫者が心臟の工合が能くないと云つて居られたが其夜の九時に急に逝去した。二十餘年こゝまで任上げたものを實に残念な事をした。

情なく今宵あらしは吹き折りぬ

心づくしの松のわか木を

秀雄は手術してから丁度二週間食物は流動物を取る許りで食欲が進まないが苦は何も感じない麻痺した儘である。食鹽水の注射をしても痛い顔もしない。しかし氣分は確であつた。秀雄は學問といひ品性といひ申分がないので親類中の尊敬の中心であつて、病中皆様から親切にされた片山のおばさん(片山東熊の妻)はここに注意をして下された。逝去の日には主計も多聞も側に居る靜は身體をさすつて居る片山のおばさん三宅のおばさん(三宅雄二郎妻)其他知人も側に居つた片山おじさん(熊)は十五分許り前に是ならよからうと云つて歸られた位で、まだ、と思つて居つたのが急に心臟が麻痺してしまつた。在院中何等の不足を云はず何等の苦を訴へず實に眠るが如くに逝つてしまつた。行先は天國か極樂か、其道筋は實に一直線

ならんと思はれた。さうでも死なねばならぬものならば余はあの様な死様がして見度いと思ふが、さりて實にあつけない何か方法がなかつたものかと思はれる。

靜は此半年實に行届いた看護もした。一方ならぬ心配もしたがさうくかゝる事に立至つた。靜は氣丈な女である。秀雄逝去の夜は直に退院の手續其他萬端何一つの疎漏もなくやつてのけた。亡軀を馬車に乗せ靜と多聞と余と同乗して穩田の片山家へ着いたのは翌日の午前一時であつた。

片山家では萬事世話をして被下葬式は八月十六日と決まつた。當日は暑氣甚敷あつたが、古市、奥田、辰野、古川其外名士が見えた。叔祖父に當る八十四齡の田邊太一も出席する實に多大の同情であつた。

さていよく埋棺と云ふので親類許りになり棺上に土塊を投入するまき棺を覗いて見るなと云はうとは思つたが其暇もない内に靜は土塊を投入了つて、卒倒せんせせるを兩側に居りし主計と多聞とが支へて介抱する。此有様を秀雄が見たらさぞ悦ぶであらうと思つた。翌日は皆々揃うての墓參、今や張りつめてゐた氣も緩んで來た。

せきかねて落る涙も添ひにけり

いさや手向けんてしこの花

幽明界を隔つと雖も此志のなき通はざるべき。秀雄は諸先生にも囑望され、朋友間には信ぜ

られたものであつた。京都にても東京にても追悼會が催されて誠にさかなな事であつた。來會さるゝ人人は秀雄と同じ様な姿の人である。余は大學に教鞭を取るものであつて見ればここに斷腸の感がある。

うちむるゝ同じすがたの其中に

我子の見えぬここのかなしさ

されどこれは約束事なり、我子を教育するは他日國家の御役に充てんが爲である、其子が残念ながら逝去したこある以上は失望落膽もか悲嘆途方にくるも云ふ様な消極的では相濟まぬ、幸に東京帝國大學總長外諸氏の同情を得て茲に東京帝國大學に故工科大學々生田邊秀雄獎學資金を献じ秀雄の遺志をつぎ學を修むる人を養成するの資に供する事にした。世界はごこ迄も積極的に進まなければならぬ。

されど忘れんとして忘れ難きは親子の情、枕上時看涙一痕。

十一月二十日

(秀雄の百ヶ日、石齋書屋に於て認む)

「追想録」
に對する
感想

博士より「追想録」を贈られたる當時の日出新聞主筆大道雷淵氏は、此の年十二月十八日の同紙上にこれに對する感想を録して、故人に深厚の同情を寄せた。其の全文を左に掲げ、當時の事情を追想し、以つて故人を愛惜するの情をこゝに新にするであらう。

追 想 録

(故田邊
雄君記念)

田邊博士から追想録を題する一小冊子を贈つて來られた。是は博士の長男秀雄君の第三回忌に當り、次男の主計君が故人に關する弔文、追懷記、感想杯、色々の書き物を纏めて印行せられたものである。其收むる所は何れも故人を偲びて新愁を催させないものはない。取敢へず其の中から主計君の悲しき日記を、父博士の涙一痕を拾ひ讀みして覺えず泣かされた。自分分は故人に一面の識もないのであるが、此の小冊子の色々の文字に徴する迄もなく、兼てより故人の令聞を耳にして居た。尤逃げた魚は大きいさか、死んだ兒は容貌好しきかいふ事もあるが、故人の月且は生前より夙に定まる所があつた。親兄弟親類友人先生の間に定評の一致したものがあつたのである。中學、高等學校、大學を通じて常に優等の成績を示し、學問の俊才と呼ばれてゐた外に、親に孝、友に親切で、人格が餘程高邁であつて、友人間は固より學校なり親類なりの先輩からさへも畏敬せられてゐたのである。其の上に身體も中學時代より甚強健で、常に運動も怠らなかつたやうである。誠に理想的の人格であつたらしい。然るに一朝腎臟を病みて遂に不歸の客となつたのは人生の無常、何事も云ふ術がない、多望洋々たる前途を有した二十三歳の大學生が、此の一小冊子に記念を留むるに至つたのは實に果敢ない次第であるが、併し此の冊子の中に記されてゐる所によるに、知人數十名の贖金によりて製作せられた故人の半身の銅像が、故人の在學して居つた東京工科大学の建築學科備付標本

こして寄附せられて居るが、是は師友及後進が永く故人の人格を偲ぶべき好個形見である。尙其利子を以て工科の建築學科學生の貸費に充て、餘裕あらば他學科學生にも及ぼす云ふので、父博士より田邊秀雄獎學資金若干を寄附、野村彌三郎、中井三郎兵衛、重盛、近、溫、井、亮、吉、森、外、三、郎の諸氏が又本資金中に寄附をせられてゐるが、是は實に故人を偲ぶに適はしい美舉であるのみでなく、又故人の遺志に酬ゆるの盛事といふべきものであらう。故人の現身は亡くなつた。併し故人の高くして活ける志は、此の資金によりてのみでも、永久に相傳はつて朽ちないのである。

大正五年十二月十八日日出新聞所載

(東京帝國大學に對し、故田邊秀雄氏の名を以つてせる獎學資金の寄附、及び故人の半身銅像に關する文書は、「追想錄」一卷に載せて詳かである。左に其の二三を摘録するであらう。

寄 附 願

一 故工科大学々生田邊秀雄獎學資金

右資金ノ利息ヲ以テ工科大学建築學科學生の貸費ニ充ル事、但シ餘裕アル場合ニ於テハ他學科學生ニ貸費スルモ妨ナシ

右資金總額ハ目下定ラサルヲ以テ數回ニ分納ノ筈、尤モ第壹回ハ金五百圓トシテ

田邊朔郎博士六十年史

四〇〇

本年度内ニ納入ノ事

前件御許可相成度此段出願候也

大正三年十月

京都市淨土寺町眞如堂前

工學博士 田邊朔郎

東京帝國大學總長

理學博士 山川健次郎殿

寄附願

一故工科大學々生田邊秀雄半身像 壹基

右工科大學建築學科備付標本トシテ貴學へ寄附

前件許可相成度此段願出候也

大正三年十月

京都市淨土寺町眞如堂前

田邊朔郎

本學工科大學建築科學生等ノ貸費ニ充ツベキ爲メ故工科大學々生田邊秀雄獎學資金

トシテ若干ノ金額數回分納寄附相成度旨出願候趣承諾致候御厚志深謝之至候右寄附
金納付ノ上ハ指定ノ費途ニ充ツベク候 敬具

大正三年十月十九日

東京帝國大學總長

理學博士 山川健次郎

工學博士 田邊朔郎殿

工學博士 田邊朔郎

本月十二日付願故工科大学々生田邊秀雄肖像ヲ本學へ寄附ノ件許可ス

東京帝國大學總長

理學博士 山川健次郎

拜啓時下秋冷之候に御座候處益々御多祥の段奉賀候扱先日御賢息には東京帝國大學
に御在學中病氣に被爲罹終に御養生も相不可御逝去相成候段誠に悲嘆の至に不堪就
ては爲亡秀雄君東京帝國大學へ貸費生用獎學資金御納入に相成候趣承り候間甚以て
乍輕少爰に金貳百圓也右御納入金中へ御差加へ願度に付宜敷御受納被成下候はゞ本
懐の至に御座候先は右の段申上度早々頓首

大正三年十一月二日

中井三郎兵衛

田邊朔郎様

謹啓

寒氣益相加はり申候處御健勝被爲在奉慶賀候陳者御令息田邊秀雄君偶々病魔の犯す所となりれ昨冬大磯に御療養中御令嬢様御同行御見舞の際特に弊社の願を許容せられ第二期水力電氣工事地を親しく御踏査被爲下設計上種々御指導を蒙り御懇情の段一同奉感謝候

承れば御令息様には藥石其効無く遂に溘焉遠逝被爲遊候由寔に痛惜哀悼の至に不堪候殊に資性顯悟豁達に被爲涉將に工科大學々業成り邦家の爲め御奮勵可被爲在の時に際し俄然此悲事あり斷腸の思に不堪候此度工科大學に故秀雄様獎學資金御寄附の御舉有之候由甚だ乍些少聊か御英靈慰安の驗迄に金壹百圓也同資金の内に御加へ被不度幸に御許容被下候得ば本懐不過之候

先は右乍畧儀御申詞を兼ね御願迄如此に御座候 草々敬具

大正三年十二月廿四日

四日市製紙株式會社

工學博士 田 邊 朔 郎 殿

取締役 重 盛 信 近

田邊秀雄氏半身銅像は、其の表面に左記略傳を刻す。

田邊秀雄工學博士朔郎長子明治二十五年生於東京三十七年入京都第一中學校爲特待生經第三高等學校入東京大學工科大正三年八月病歿享年二十有三承其遺志納金若干於大學以爲獎學之資

同半身像裏面に記載せる出資者氏名

磯	先三郎	稻垣秀實	井上與一郎	今林彦太郎	池田光四郎	石井清雄
原田	俊雄	濱本幸太郎	戸川四郎	土居原龜之助	朝永研一郎	大塚剛三
小川	一清	小久保政春	小倉強	大東顯吉	和辻春樹	片山東熊
角南	隆	上村好文	余郷宗次	高橋榮次	高橋眞太郎	高見二郎
田邊	朔郎	武田敬治	竹内直彦	高田清太郎	高田善治郎	中西甚作
中澤	正彦	永澤毅一	村井市孝	郡司恭雄	桑田正一	柳澤彰
山崎	英二	松尾龍一	松浪金藏	松井孝長	小林政一	五嶋裕
阪部	保吉	北澤五郎	菊池白	木下市之助	三橋國太郎	水野源三郎
三浦	耀	三宅勤	三宅雄二郎	志知勇次	莊野精二郎	清水吉三

久留弘文 森田平治郎 鈴木鹿象 金森誠之

銅像裏面の歌

秀雄のみまかりしとき

なさげなく今宵あらしは吹なりぬ

こゝろつくしのまつのわか木を

同窓生主催の追悼會席上にて

うちむるゝおなしすかたの其なかに

わか子のみえぬこそ悲しさ

朔郎

田邊秀雄獎學資金の擧を賛成し寄附せし人々

一金四百圓也

野村彌三郎殿

一金貳百圓也

中井三郎兵衛殿

一金百圓也

重盛信近殿

一金百圓也

溫井亮吉殿

一金五圓也

森外三郎殿

其他略

〔②道想録〕は通卷九十二頁より成る。編者たる令弟主計氏の序文、並びに目次は左の通りで、大正五年十一月十三日の發行に係るのである。

兄様は人格の高い人であつた。死後各處から弔文其他種々な書き物を贈られたので之を纏めて上梓し知友に分領することにしたので此書である。大正五年八月十三日、第三年忌に當り東京にて田邊主計。

兄様についての文章目次、田邊秀雄君を憶ふ、木下市之助、中學時代の回顧、木下市之助、松井孝長、亡友を悼みて主計君に送る、高田清太郎、墓標に凭れて、高見二郎君の人となり、(和辻春樹)思ひ出のニツ三ツ、田中鐵三、理學博士三宅恒方、三宅龍子、片山てる子、和歌、悲しい日記(田邊主計)涙一痕(工學博士田邊朔郎)田邊秀雄獎學資金、田邊秀雄半身像成製作費寄附者人名、追悼會出席者人名及弔文。(以上)

二、蓮舟翁の逝去其他

田邊蓮舟翁逝く

大正時代に於ける田邊家の不幸は、嗣息秀雄氏の夭折を最とし、次いで大正四年九月十五日、博士の叔父蓮舟田邊太一氏、また八十五歳を一期に溘然として永眠したことである。氏⁽¹⁾が幕末の外交家として名聲を馳せ、晩年振はざりしも其の餘光を以つて錦鷄祇間侯たりしこと、博士とその叔甥の間柄の親密なりしこと、其の家に

後なかりしたため博士の二男主計氏は入りて養嗣子となりしこと。それらをいま詳しく叙ぶるよりも、愛兒を失ひたる博士夫妻が、今又如何に老齡なりしにもせよ、唯ひとりの親しき叔父の長逝にあひて、人生悲寥の感を一層切ならしめしを傳ふれば足るのであらう。

危篤の報
を得て急
遽東上す

博士は蓮舟翁の逝去せる前日、十四日に危篤の報を受けて急遽東上した。斯くて翁の葬儀は、十七日青山齋場にて佛式を以つて執行せられた。故人の人物に就きては、現に翁の遺墨にして、博士邸に存する七言律の一軸の由來に關聯し、博士の或る人に語れる談話の一節にいふ。

先年京都で渡邊千秋さんに御目に懸つたとき、渡邊さんが、あなたは叔父さんに家を建てておあけなさつたので大層悦んで御るで、すゝ御話があつたので私は、さうしてそれを御存じなのです、實は其の家に這入るこゝになつても私に禮一つ云はない人です、私にはさうでもよろしいけれど、他人にもうすこし御上手が言へたらば、思ふこゝもありませんが、いふと、渡邊さんは家のこゝは叔父さんの作られた詩を拜見して知りました、この御話であつた。それ故私は其の後調べて見るに、花香月影第五十五號に

移居青山從子朔郎爲營一室爲讀書之所賦之志喜

琴書十載幾回移。如洗貧無地立錐。逃俗寧甘龜曳尾。入時未解黛描眉。任憑世上笑鴛拙。頼有汝曹憐叔癡。新搆茅軒穩容膝。不教伯道嘆無兒。

こいふのが載つて居たので此の事を東京に行つたとき、叔父に話したら、夫では一枚書いてあげませうと云はれて書かれたのを貰つて來た。それが此の幅であります云々。

蓮舟翁の爲人

「家を建て、貰つても禮一つ云はぬ人」これが蓮舟翁の世に容れざる狷介孤立の一面である。以つて彼や蕭索たる晩年の不遇を世上の嗤笑に委せて顧みざるも、あゝ頼有汝曹憐叔癡、新搆茅軒穩容膝、不教伯道嘆無兒と、愛甥の誼を念うて老眼いつしか熱するに堪へず、私かに毫を揮つて感謝の念を託するところ、其の濃かなる他面の情懷を偲ぶに餘りあるではないか。

姉婿片山東熊博士易簣す

博士の不幸はこれに止らず、大正六年十月二十一日には、令姉鑑子の夫君たる正三位勳一等工學博士片山東熊氏の易簣にあうた。博士は其の月二十六日、宮中より片山家へ祭資料等の下賜ありたるより、宮内省並びに各宮家に遺族代理として御禮伺候した。思へ、一門の血屬、年を逐うて黄泉の客となり、老博士が書窓を拂ふの秋風、自ら浙瀝たるを覺ゆるを。

博士二十
二年振に
臥床す

博士一身上の事故としては、此の時代にインフルエンザに冒されて高熱を發し、博士は十日間全く臥床した。これは大正五年二月下旬のことであるが、明治二十七年十二月に窒扶斯を其後の丹毒を患ひてより、殆んど二十年間病臥せしことなき博士にして眞に珍らしいことであつた。所謂不幸續きの精神的打撃が、知らず識らず推積して、健康を弱めたものであらうと同情せらるゝのである。

〔蓮舟翁の人物に就き、幕末の青年に慕はれた田邊翁と題し舊幕臣にして親友の間柄なる安藤太郎氏の談に曰く。

「翁の嚴父は舊幕の儒者田邊石庵と云ひ大西郷等と親しく交際した人である。翁は天保二年の生れで、今年八十五歳の老齡にも拘らず頗る元氣なものであつた。翁は幼少の頃から漢學詩文に長じ、中村敬宇、重野安譯等と徽典館出身者で、所謂學者として立つべき人であつたが、途中俗吏となり、先づ外國方の組頭として其敏腕を揮はれた。當時翁の書いたものは特別扱ひをされたもので、其の文書は一應若年寄に見せる規定であつたが、他の人のものは知らず翁の書いたものであれば、田邊の書いたものならよし」と目も通さなかつた程、翁の文書は重んぜられたものである。池田播磨守が使節として歐洲へ渡航した際も翁は隨行した。福澤諭吉氏も此時同行されたと思ふ。次で歸國後ナポレオン三世の時、巴里に開かれた大博覽會の際、徳川十五代將軍の弟清水民部郷の補佐とし

て渡航し、前後維新前に二回歐洲に渡航した。随つて當時第一流の歐洲通であつた。歸國後駿州の某學校の教員となつて暮して居る内、時の外務卿寺島宗則氏に召し出されて外務少丞に任せられ、更に岩倉大使外遊の時は一等書記官として隨行し、歸朝後外務省に勤めて居たが、後支那代理公使となつて渡支した事もある。元老院から退官後は、錦雞間祇候となつて、晩年を詩文に送つて居た譯である。翁の性質は口數の少い極めて親切な人であつただけ、其家には様々な人が出入した。即ち維新前後の青年といへば翁を知らない者が無かつた。而して當時の青年は翁を田邊と云はず、田兒デンケイと云つて慕つたものである。それに翁は風流の遊びが好きであつた爲め、晩年になつては不如意の生活を送られた。賢明な令息に先立たれたのも翁が晩年を遊蕩に送られた一原因であらう云々。

三、博士還暦の日を迎ふ

次男主計
氏蓮舟の
家を繼ぐ

しかも博士が斯かる精神上の打撃は、また他の一方に於ける平靜の日常生活に恵まれて、年を逐うて幾分にも薄らぎゆけるを否み能はぬ。即ち蓮舟家の養嗣子にして、博士の次男なる主計氏は、同志社大學を卒業して三井銀行に入社、博士の嗣子となるべき三男多聞氏は、東京帝國大學工學部の機械學科を卒業し更に法學部

に就學中である。四男亮吉氏は慶應義塾大學經濟學部に在學。長女とし子は、京都府立第一高等女學校を卒業して、東京なる聖心學院語學校に入學。

令息令嬢
の成長と
ともに博
士華甲の
齡を迎ふ

令息愛嬢の斯く成長して、或は自立して社會の人となり、或は高等の學業に就くに至るとともに、父なる博士の齡も次第に重なりて、いつしか還暦の日を迎ふるに至る。即ち大正十年十一月二十九日、此の日は博士が六十年前、呱呱の聲を擧げたる文久元年舊曆十一月朔日に相當する。而して此の日を迎へて、博士の六十年史は、こゝに芽出度く擱筆することゝなるのである。